

『拜月亭』傳奇流傳考

岡崎 由美

はじめに

一、金朝故事の系譜

二、宋朝故事の系譜

①傳奇小説『龍會蘭池錄』

②弋陽腔系『拜月亭』

③地方戲

④説唱俗曲

おわりに

はじめに

西曆千二百十四年、金の宣宗の時、元の侵略をうけた金王朝は中都（北京）から南京（汴梁）への遷都を決定し、皇帝以下中都の民は戦亂の中を南へ追われた。『荊釵記』『劉知遠白兔記』『殺狗記』と並んで四大南戲と稱される『拜月亭』はこの史實に取材し、才子佳人の悲歡離合を描いている。

金の遷都によって汴梁を指して避難する中都の書生蔣世隆は、曠

野で妹瑞蓮を見失なう。瑞蓮の名を呼ぶ世隆の前に、母親とはぐれた王瑞蘭が蓮と蘭を聞き違えて現れる。金の尙書令孃瑞蘭は、女一人の心細さに世隆と旅するうち、磁州廣陽鎮招商店で契りあう。折しも邊塞へ使ひして來た王尙書は招商店で娘瑞蘭を見つけ、病床に伏した世隆のもとから無理やり連れ去ってしまう。一方、世隆の妹瑞蓮は瑞蘭の母と連れになり、孟津驛で尙書一行に合流する。無事汴梁に着くも瑞蘭の心は晴れず、密かに月を拜して世隆の無事を祈る。それを瑞蓮が見とがめ、互いに身の上を明かす。さて世隆は、義兄弟の固めをした陀滿興福と汴梁で金王朝の科擧に應じ、世隆は文狀元、興福は武狀元になる。王尙書は娘瑞蘭と瑞蓮に文武狀元の婿を迎えんとし、それが契機となって瑞蘭世隆は再會し、瑞蓮は興福に嫁ぐ。これが、一般に知られる『拜月亭』傳奇の物語展開である。

元來、元の關漢卿の作である『閨怨佳人拜月亭』雜劇を元末明初の頃南戲に改變したといわれるこの戯曲は、改變當時の原本こそ傳わっていないが、萬曆頃から數種の校訂本が刊行されて定本化の道をたどるなか、この情節が定着した。

『拜月亭』では、金の遷都という時代設定が物語の形成に大きく關與している。この設定に沿って登場人物の素姓は説きおこされ、避難

の地理的移動と時間軸に従って出會いや別れが進展する。物語を受け入れ、又傳える營みは、「いづどこで誰が何をした」という筋のみならず、筋を醸成する設定の發想も含めて、元曲から南戲に繼承されたわけである。從來の『拜月亭』研究もおおむね元曲から南戲への、全幕通して残る全本の範圍で、金代の金の國土を舞臺にした金朝人の戀物語の展開に沿って、改變の様相や版本の考察がなされて來た。

ところで、『拜月亭』の物語は、このように全本定着化が進行する一方で、断片的にせよ地方に傳播し、その土地の言葉やメロディで唱われ、又、小説や説唱文藝といった戯曲以外のジャンルにも残った。これらの存在及び南戲との相違點はその都度觸れられてはいるが、物語が首尾完結して残っているテキストがほとんど無く、零碎な断片的資料ばかりである爲か、参考として提示される事はあつても、全體的な『拜月亭』流傳の系譜に、系統的に位置づけられた事はなかつたように思われる。これらの『拜月亭』物語は、定本化してゆく全本『拜月亭』傳奇の脈流とどのような關係で、どのように受容繼承されたのであろうか。

本稿は、從來あまり顧られなかつた地方戯曲、小説、説唱俗曲の資料をも含めて、『拜月亭』の受容繼承のあり方と、それを傳える文藝メディアを關係づけながら、流傳の様相の比較考察を試みたものである。

一、金朝故事の系譜

現存最古の『拜月亭』戯曲は、『元刊雜劇三十種』所收の關漢卿撰『閨怨佳人拜月亭』である。話の筋は、今さら詳説するまでもなからう。金王朝の中都から汴梁への遷都を背景に、金の高官令嬢瑞蘭と中都の書生蔣世隆が、旅途夫婦の契りを結ぶも瑞蘭の父によって仲を裂

かれ、瑞蘭の拜月の祈りが通じて、狀元に合格した世隆が妻や妹と再會團圓する経緯は、既にこの段階で出來上がっている。但だ、瑞蘭の姓氏、陀滿興福の名、招商店の場所等具體的な固有名詞は、テキスト中には明確にされていない。このテキストは實白の記述が稀少で、歌詞と主唱者正旦のセリフ以外は、メモ程度の卜書きで演出を進める。現場の俳優向けの實用的シナリオの形を呈する。この、口傳とアドリブの力を充分に潜めたテキストは、それでも「曠野奇逢」「招商諧偶」「隆蘭拆散」「拜新月」「雙雙成親」といった物語の骨幹を、既に歌中幾度も繰り返される「中都から汴梁へ南遷」の設定に乗せて送り出している。

『拜月亭』の物語は、雜劇に代わって南戲が勢いを強める中で、他の多くの雜劇演目同様、南戲の演目に吸収された。元⁽¹⁾の天曆至正間の南曲曲譜に據って編纂された『彙纂元譜南曲九宮正始』⁽²⁾收録の『拜月亭』⁽³⁾殘曲は、「元傳奇」と注されている。恐らく元末には南戲に繼承された『拜月亭』は、その當時の原本が傳わらず、その後も長く流傳の痕跡をくらませていたが、明萬曆年間に至って終始結構揃った全本が續々と刊行される。

南戲『拜月亭』の版本については、既に車錫倫氏「南戲『拜月亭』的作者和版本」及び俞爲民氏「南戲『拜月亭』作者和版本考略」⁽⁴⁾に、現存の南戲『拜月亭』全本七種の版本考がなされている。その七種とは、世德堂刊四十三齣本と、李卓吾批評容與堂本、文林閣『繡谷演劇』本、汲古閣『六十種曲』本、師儉堂『六合同春』本、德壽堂本（暖紅室『彙刻傳奇』）、凌延喜本（武進涉園影印）の四十齣系六種である。容與堂本、汲古閣本、師儉堂本は題を『幽閨記』とする。

ここで、以下の論を進める爲に先行諸論をふまえて些か整理してお

きたい。四十齣系の中でも、容與堂本と德壽堂本は第二齣と第十一齣の曲牌に入れ換えがあり、凌延喜本は沈璟の舊本を参照に用いて、嚴密に言えば些か系統を異にするが、それを上回って、世德堂本とその他の四十齣本六種は大きく異なる。

まず、四十三齣という幕構成の根本的差異は、各齣の曲牌構成及び情節の差異に直接つながる。世德堂本の第十六、十七、十八折（世德堂本は「折」を以て示す）は、四十齣系の第十六齣に收められる。それでも「拜月」の場面までは、曲牌及び文辭にかなりの出入りがあるものの各齣を對應させる事が出来るが、以下はそれも不可能な程異なつて来る。使われる曲牌が全く異なり、歌われる内容も異なる。

即ち、後半では情節も違つてくるのである。世德堂本では、世隆が王尙書の縁談を承諾してしまふが（第三十九折）、四十齣本ではあくまで拒絶する。俞爲民氏は、この違いに「誤接絲鞭」の場面を示唆する。明・凌濛初の『南音三韻』戯曲下（越調小桃紅）曲の總評に、「時本と絶^{はな}だ異なる」沈璟抄『拜月亭』不全舊本を挙げ、

皆錯訛零落し、讀む能はざるに至る。猶は讀む可き者は、惟だ遞絲鞭一折、及び此の套（越調小桃紅）のみ。爾時之を錄せざるを惜しむも幸ひに此の套譜中の收むる所と爲る。故に復た之を表出するを得たり。其の曲中應答の情節は蓋し遞鞭の時、二人（世隆、興福）皆受くるに因りて、團圓の折、王反つて蔣の違盟受鞭を怒るは、故復た許くの如き宛委有り。

と述べられている。世隆の「接絲鞭」（縁談の承諾）をとがめて、自分というものが有りながら何故相手のわからぬ縁談を承知したと瑞蘭が怒る演出は、この時既に舊本から推測するしかなかったわけである。この演出は、元曲の第四折に始まって、『彙纂元譜南曲九宮正始』や

嘉靖本『舊編南九宮譜』の越調過曲（「二犯排歌」及び「五般宜」）に繼承され、舊拜月亭には存在していた。世德堂本も舊本の「小桃紅」曲を第四十三折に残し、「接絲鞭」の痕跡もある。但し、瑞蘭が怒る場面そのものは既に無い。

『九宮正始』『舊編南九宮譜』に残る舊拜月亭の曲は、文辭の面でも世德堂本の方が近く、四十齣系は改變甚しい。『九宮正始』は「拜月亭」の曲を百三十三支收録している。そのうち、世德堂本にのみ見える曲が八種九支ある。ほとんどが「拜月」の場面以降の曲である。

これから見るに、世德堂本は原本通りではないにしても、四十齣本より舊拜月亭の面影をよく残した、舊本に近いテキストといえる。

世德堂本は文辭も素朴通俗で、四十齣本とは聲律の合わない部分が多い。第四十三折（尾聲）では

醞釀就全新戲文 書府番騰燕都舊本

と、書府（書倉）の改作を示唆しており、實際の上演と結びついた實用的脚本の性格が強い。一方、四十齣諸本は、李卓吾、羅懋登、陳繼儒等當時の名のある文人の校閲によるもので、美辭麗句が多用され、讀曲に供する讀み物指向もあると思われる。四十齣本が續々出版される中で、世德堂本を直接受け継いだものに、

新刊分類出像陶真選粹樂府紅珊

明・秦淮墨客（紀振倫）選輯

明萬曆壬寅（一六〇二）唐振吾刊

清嘉慶庚申（一八〇〇）積秀堂覆刻本

の第十卷遡還類『拜月亭』散齣「蔣世隆曠野遇王瑞蘭」（目錄題「蔣世隆曠野奇遇」）がある。曲牌構成、文辭共に四十齣本からはかけ離れ、世德堂本に據る。凡例で學唱者に對して細かに歌唱の技術を教示して

おり、實際の歌唱の用に供する意圖を以て編集されたと思しい。口承傳播に生きる世徳堂本の側面を見ることが出来る。

南戯に改作された元末から世徳堂本までの間、舊拜月亭は文字テキストの定着力が弱く、爲に『拜月亭』流傳の痕跡をたどるには長いブランクがあったが、四十齣本が續々と出て、本來の姿がどうであれ、文字テキストに腰を落ち着けた。舊拜月亭と新拜月亭の分け目には、文辭内容の差異のみならず、テキストとしての固着力の強さ弱さと受容繼承するメディアのあり方が關わっている。これは、南戯が讀書人の鑑賞に耐え、讀曲といった受容のかたちが現れて來た事、崑山腔の隆盛による聲律重視の戲曲理論が構築されて來た事、及び出版事業の隆盛等を背景とするであらう。

しかし、種々の改變を経て、全本定着化への反復過程には、尙ゆるぎなく繼承される系譜の基本的枠組みがあった。元曲以來、新舊拜月亭を通して今日の崑曲まで、金王朝の人々を描いた物語として傳わっているのである。

二、宋朝故事の系譜

①傳奇小説『龍會蘭池錄』

萬曆年間に、「通俗類書」と通稱される一定の編集形式を持った書物が次々と刊行される。孫楷第氏は『日本東京所見小説書目』巻六明清部五で

諸體小説之外、間以書翰、詩話、瑣記、笑林、用意在雅俗共賞と解説している。一般に版式を上下二層に分け、片方を雜纂、片方を當時の長篇文言小説にあててゐる。この長篇文言小説も萬曆出版物中の大

『拜月亭』傳奇流傳考

きな特徴で、單刊發行もされていたよう^(?)だ。從來の文言小説の枠を越えた、四、五萬字の規模を持つ。かくも長大な文言小説がこれほど密集して刊行された現象は、前にも後にもなからう。

この通俗類書のうち二種に、『拜月亭』の物語を描いた長篇文言小説が見える。一つは、

新刻京臺公餘勝覽國色天香⁽³⁾（内閣文庫藏）

明・謝友可撰 吳敬所編

萬曆十五年（一五八七）謝友可序

萬曆二十五年（一五九七）周氏萬卷樓重刊本

卷一下層「龍會蘭池錄」

もう一つは、

選鐫騷壇撫粹噲麝譚苑繡谷春容（東京大學東洋文化研究所藏）

明・起北齋赤心子輯

萬曆間世徳堂刊本

卷一上層「龍會蘭池全錄」

同書異本である。字句にはかなり異同がある。『繡谷春容』本『龍會蘭池全錄』では、『國色天香』本中の挿入詩詞が相當削除されており、「又詩云」と二首の詩詞をつなぐ部分で、先行の「柳青梢」詞を削除して尙、「又詩云」が残されている部分がある。他の部分では、先行の詩を削った場合、「又云」は削除に合わせて訂正されているから、この部分は調整を忘れたのであらう。従って、『國色天香』版は『繡谷春容』版に先行すると考えられる。

『龍會蘭池錄』（以下内閣文庫藏『國色天香』版に據る）の題名は、主人公世隆の「隆」（龍）とヒロイン瑞蘭の「蘭」を組んだ趣向であらう。話の内容は『拜月亭』傳奇を描いたものだが、情節展開は、特に後半

部分、南戲から甚しく逸脱する。のみならず、舞臺や人物の設定も南戲とは異なるものである。それを以下に對照しておきたい。

〈舞臺設定〉

(拜) 金：中都→汴梁

(龍) 南宋：汴梁→臨安(杭州)

〈人物設定〉

① (拜) 蔣世隆・中都の書生、後金朝の狀元

(龍) 蔣世隆：汴郡の書生、後南宋の狀元

② (拜) 王瑞蘭：金の尙書王鎮の娘

(龍) 黃瑞蘭：宋の尙書黃復の娘

③ (拜) 張夫人：瑞蘭の母

(龍) 湯夫人：瑞蘭の母

④ (拜) 陀滿興福：金のもと宰相の息子

(龍) 蒲嫁興福：金の逃將

⑤ (拜) 六兒：尙書の下僕

(龍) 留兒：尙書の妾腹の子

〈情節展開〉

① (拜) 世隆瑞蘭結婚の場は磁州廣陽鎮招商店

(龍) 世隆瑞蘭結婚の場は湖南瀟湘鎮瀟湘店

② (拜) 「雙拜月」は世隆と別れた瑞蘭が瑞蓮と共に行なう。

(龍) 「雙拜月」は世隆と瑞蘭が結婚の誓いとして行なう。

③ (拜) 世隆が病氣になつて醫者を呼ぶ。

(龍) 世隆が病氣になつて瑞蘭は鎮山朝海神に平癒祈願をする。

④ (拜)

(龍) 黃尙書は世隆が死んだと瑞蘭を騙す。

⑤ (拜) 瑞蘭は團圓の場まで狀元が世隆である事を知らない。

(龍) 世隆は杭州に到着すると、預め密かに瑞蘭に連絡をとる。

⑥ (拜) 世隆の妹瑞蓮は興福と結婚する。

(龍) 世隆の妹瑞蓮は探花賈士恩と結婚する。(賈士恩はここにもみ

出てくる名で、物語展開上全く必然性を持たない)

『龍會蘭池錄』の特徴の一つは、『拜月亭』傳奇の小説化、所謂ノベライゼーションでありながら、當時の戯曲小説の改變にありがちな本歌取り——文辭や表現の踏襲を行なっていない事である。物語の繼承は、『龍會蘭池錄』の内容が『拜月亭』の話であるという、本事の輪郭その一点にのみ接し、文字テキスト接觸の痕跡を掴ませないのである。作者が意圖してかしないかで、大まかな梗概に據つて、就かず離れずのまま叙述を展開しており、『拜月亭』のあら筋の記憶、或いは觀劇した實演に觸發されて書いた情景も考えられる。

こうして形成された『龍會蘭池錄』の最も特筆すべき特徴は、『拜月亭』傳奇との比較の冒頭に挙げたように、その設定の轉換にあった。『龍會蘭池錄』に云う：

時に金、元兵に迫られ、中都より汴に徙る。宋の邊城にして汴に近きは、又、金兵に迫られ杭す。光州固始の黃尙書復家、衆に従ひて南奔す。

當時、中華の地は北に金、南に南宋と二分されていた。金の遷都による南下の騷亂は、ところてん式に汴梁近くの南宋人をも更に南へ向けて追いたてたのである。『龍會蘭池錄』に於ける發想の轉換によつて、從來の『拜月亭』で侵略される側だった金は侵略する側となる。金の人々が平安を求めて目指した旅の到達點汴梁は、今度は戰亂の町としてとらえられ、戰災に家を棄てて逃げる旅の出發點となった。世

隆は、臨安で南宋の科擧に應じて狀元となる。

異民族王朝元から中華の地を漢民族の手にとり戻した明王朝に於いて、戦亂の巷に花咲く戀物語の主人公を、なじみのない異民族王朝から同胞の血の中へ呼び戻そうとする發想は想像に難くない。殊に、北方の異民族や地理になじみのない南方に於ては尙更であらう。こうした發想は、どのような流傳の系譜を形成してゆくのであらうか。

②弋陽腔系『拜月亭』

嘉靖の頃魏良輔が改良した崑山腔は、その優美な調べが讀書人にも好まれ、盛んに流行するようになって、南戲の中心を占めるに到る。

崑曲に據つて聲律を重視する沈璟が『還魂記』を改變し、作者の湯顯祖を怒らせたというのも、崑曲の擡頭を示す逸話と見ることが出来る。優美なメロディーによる聲律理論を支柱にした崑曲は讀書人の愛好者も多く、よつて文字テキストの定着性も強いが、それまでに行なわれていた弋陽腔も、決して崑山腔に驅逐され、消滅したわけではなかった。各地に傳わつて土地のメロディーと結びつき、支流を産み出してゐる。安徽に傳わつた弋陽腔は、池州、青陽、徽州等の土地のメロディーに結びつき、青陽腔、徽州と呼ばれる聲腔を産んだ。

崑曲隆盛の中で、この腔調が必ずしも意氣消沈していたわけでない事は、萬曆年間になつて、徽調の散齣集（名場面集）が相次いで刊行された事からうかがえよう。ただ、「郷語を錯え用い」、通俗的であつたというから、洗練優美を好む讀者人の齒には合わなかつたであらう。従つて、文字メディアに依據する類のものではなく、よく上演されて好まれた場面のみが残る流傳の様相を呈し、幾つかの散齣が残るのみである。

(1) 新鐫梨園摘錦樂府青華⁽¹⁾

明・劉君錫輯

萬曆庚子（一六〇〇）書林三槐堂主會雲刻本

卷五上層『拜月亭』

「世隆曠野奇逢」（目錄題「曠野奇逢」）

(2) 鼎鐫徽州雅調南北官腔樂府點板曲大明春⁽²⁾

明・程萬里選

萬曆間福建書林金魁刻本

卷二上層『天緣記』

「曠野奇逢」

(3) 新刻京板青陽時調詞林一枝⁽³⁾

明・黃文華選輯

萬曆新歲孟冬月福建書林葉志元刻本

卷一下層『奇逢記』

「蔣世隆曠野奇逢」

(4) 新鐫天下時尙南北新調堯天樂⁽⁴⁾

明・殷啓聖編

萬曆間福建書林熊稔宣刻本

下卷下層『拜月』（版心題「拜月亭」）

「蔣世隆曠野奇逢」

(5) 新刊徽板合像滾調樂府官腔摘錦奇音⁽⁵⁾

明・龔正我編

萬曆三十九年（一六一一）書林敦睦堂張三懷刻本

卷二下層『幽閨記』（版心題「幽居記」）

「世隆兄妹散失」（原缺）

「世隆曠野奇逢」

「招商旅店成親」

(6)新鏡天下時尙南北徽池雅調⁽⁶⁾

明・熊稔實編

萬曆間福建書林燕石居主人「熊稔實」刻本

卷一上層『拜月記』(版心題『奇逢記』)

「誤接絲鞭」

以上のように、弋陽腔系徵調散齣集の中に最も多く収録されているのは、「曠野奇逢」——世隆と瑞蘭が名前の聞き違いから出會う場面である。『奇逢記』なる別題が見うけられる事からも、「蘭」と「蓮」の聞き違いによって偶然出會った二人が手に手をとって退場するに至る戀の駆け引きが聴衆に好まれ、殘存力を發揮したものと思われる。そこで、まず、「曠野奇逢」の場面をサンプルにして、前述(1)と(5)の諸本を、世徳堂本第十九折、世徳堂本を受け繼ぐ『樂府紅珊』及び四十齣本の代表として『六十種曲』本『定本幽閨記』第十七齣と比較し、徵調に於ける受容の様相を見てみたい。

先に、曲牌の構成であるが、表を参照されたい。

弋陽腔系徵調五種には、世徳堂本系には見えるが六十種曲本系では創られている「皂羅袍」の曲が収録されている。更にこの「皂羅袍」の位置が、世徳堂本、『樂府紅珊』及び『樂府青華』『大明春』では「尾聲」の前に置かれ、『詞林一枝』『堯天樂』『摘錦奇音』では「尾聲」の後に置かれる。表中○とあるのは、弋陽腔の特徴とされる「滾調」のことである。これは、曲の前後或いは中間に口語的な韻文短句を挿入して、節回しよろしく詠誦した手法と言われる。ここに挙げた五種の資料では、「古輪臺」曲中に挿入が見られる。『樂府青華』『大明春』

表：『奇逢』曲牌構成

六十種曲本	世徳堂本	『樂府紅珊』	『樂府青華』	『大明春』	『詞林一枝』	『堯天樂』	『摘錦奇音』
(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子	(1)金蓮子
(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔	(1)′前腔
(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新	(2)菊花新
(3)古輪臺	(3)古輪臺	(3)古輪臺	(3)古輪臺 ×	(3)古輪臺 ×	(3)古輪臺 ○	(3)古輪臺 ○	(3)古輪臺 ○
(3)′前腔	(3)′前腔		○	○	(3)′前腔 ○	(3)′前腔 ○	(3)′前腔 ○
(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾	(4)撲燈蛾
(4)′前腔	(4)′前腔				(4)′前腔	(4)′前腔	
	(5)皂羅袍 (a)	(5)皂羅袍 (a)	(5)皂羅袍 (a)	(5)皂羅袍 (a)	(6)皂羅袍 (b)	(6)皂羅袍 (b)	(6)* 李順哥帶 皂羅袍 <(b)
	(a)	(5)′前腔 (a)	(5)′前腔 (a)	(5)′前腔 (a)	(6)′前腔 (b)	(6)′前腔 (b)	
(5)尾聲	(6)尾聲	(6)尾聲	(6)尾聲	(6)餘文 (尾聲)	(5)尾聲	(5)尾聲	(5)尾聲

中には

(生)要知窈窕佳人意 盡在搖頭不語中

の一箇所のみだが、『詞林一枝』『堯天樂』『摘錦奇音』では、その前にもう一箇所、

(生)正是愁人莫向愁人說 說起愁人愁殺人
の句が見える。

次に文辭の繼承情況について、例示の諸本すべてに見られる曲牌の中から、冒頭「金蓮子」の曲を代表例として比較してみる。

(六)古今愁。古今愁。誰似我目下這般愁。聽馬驟人鬧語。聽馬驟人鬧語。向深林中逃難。恐有人搜。

(世)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(紅)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(菁)古今愁。誰似我目下這般憂。聽得驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(大)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(詞)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(堯)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

(摘)古今愁。誰似我目下這般憂。聽馬驟人鬧語。急向深林中避。只怕有人搜。

六十種曲本のみが大きくかけ離れ、世徳堂本系と弋陽腔系五種が似通っている。この相違は、六十種曲本が點板や用韻重視の聲律調整に従っているからであろう。崑曲に據った聲律派沈璟の『增定南九宮曲譜』もこの調律を採用している。

世徳堂本の要素を持ちつつ、改變の痕跡を示したものでは、「撲燈蛾」曲中の賓白部分と「皂羅袍」曲がある。「撲燈蛾」は、母とはぐれた瑞蘭が世隆に同行を頼む場面である。六十種曲本では、

(旦)秀才、你讀書也不曾。(生)秀才家何書不讀覽。(旦)書上說道、側隱之心、人皆有之。

瑞蘭 秀才殿、御本はお読み？
世隆 秀才たるもの讀まぬ本がありませんか。

瑞蘭 書物に申します。誰しも哀れみの心があると。
このように讀書人の道德心に訴えかける。一方、世徳堂本系及び弋陽腔系は「詩經」の句を導入して、男女の情をほめかす通俗的演出を行なう。世徳堂本を代表に擧げておく。

(旦)你敢是讀論語孟子、不曾讀毛詩。(生)毛詩如何道。(旦)窈窕淑女、君子好求。

瑞蘭 論語孟子はお讀みなのに毛詩は御存知ないの？
世隆 毛詩になんと言います？

瑞蘭 窈窕たる淑女は君子の好迷たり、と。
同じく「撲燈蛾」には、六十種曲本系に見られぬ通俗的演出に、瑞蘭が「夫妻を装って同行してくれ」と言いだしかねて、謎かけをするやりとりがある。世徳堂本では、

(旦)怕問時權說做夫。(生)娘子說話好輕薄、小生是饒門中秀才、怎的去叫我做夫。(旦)不是做夫、夫字下面的。(生)夫字下面的不是夫子、是夫人。(旦)冤家、他明明知道、故意詐騙奴家。(唱)

怕問時權說做夫妻。
瑞蘭 (唱)とがめらるれば、ひとまず做夫……。

世隆 浅はかな。私は讀書人、なにゆゑ做夫など。

瑞蘭 做夫ではありません。夫の字の下に、

世隆 夫の字の下に、夫子でなくば、こりや夫人か。
瑞蘭 冤家、御承知のくせに詐騙るおつもりね。(唱)とがめらるれば、

ひとまず夫妻と申しましよう。

この演出も、弋陽腔系五種すべてに繼承されている。

〔皂羅袍〕曲は、同じ曲牌を使いながら、全く文辭の異なる(a)(b)二種の型がある。世德堂本系及び『樂府菁華』『大明春』では、

(生)漸漸紅輪西下。見林梢數點昏鴉。前村燈火有人家。江山晚景堪揮盡。錦堂富貴玉帳榮華。遭逢兵火勞碌波瀾。正是危巖致取千金價。

(旦)暗想溪山跋涉。不由人珠淚如絲。鞋弓襪小步難移。我嬌花不慣風搖拽。天將曠曠。欲進趨趨。那故園何在極目慘悽。危途權做資身計。

とそれぞれの嘆きが唱われる。『詞林一枝』『堯天樂』では

(生)千般憂不自在。看他臉皮兒生得多人愛。見幾個在林中躲。咱兩個在途路挨。你將愁眉暫展開。憂愁放下懷。我有方羅帕與你搵住了香腮。(合)你將紐扣兒鬆。羅帶兒解。歹也麼歹。咱和你商量取。一步步趨上來。

と、極めて口語的で通俗的な文辭が用いられ、まめまめしく世話をやき、いたわりあう、くだけた内容が唱われる。

ところで、この〔皂羅袍〕曲は、『摘錦奇音』で更に改變されている。『摘錦奇音』の編者龔正我は安徽歙縣の人で、この書は徽調の發生地で編輯出版されたものである。『摘錦奇音』の〔孝順哥帶皂羅袍〕曲は、我將汗巾兒與你搵香腮。你把途路上憂愁且放懷。

といった文辭に見られるように、『詞林一枝』『堯天樂』系の血を引きながら、弋陽腔系五種のうち唯一、世隆と瑞蘭の素姓を明らかにする(旦自敢問、君子家居那裡。姓甚名誰。(生唱)家住離城五里臺。蔣世隆鬢門中一秀才。……(生自動問、小娘子家居那裡。姓甚名誰。

(旦唱)家住汴梁城鼓樓街。我爹爹朝中奉欽差。

弋陽腔系諸本の殘存情況は、積極的に宋とも金とも決め難い、朝代のばやけた傾向の散齕ばかり残っている。その中で『摘錦奇音』の「曠野奇遇」には、「龍會蘭池錄」での素姓とは異なるが、汴梁の人世隆と瑞蘭が南遷する宋朝故事系の發想が見えているのである。

以上の事から、弋陽腔系徽調への浸透は、世德堂本が受け継いだ舊拜月亭の脈流に求められる。この中で『樂府菁華』『大明春』と『詞林一枝』『堯天樂』『摘錦奇音』は、受客の上で二筋の系統を示す。後三者の方が、浪調や通俗表現の導入に、より積極的な改變加工が認められる。そして、汴梁から南遷する世隆瑞蘭の設定は、世德堂へ流れこむ舊拜月亭の支脈がいずれかの時點に弋陽腔に浸透し、『詞林一枝』『堯天樂』を経て『摘錦奇音』につながる系統の中で醸成され、發現したと考えられる。

その補足として、弋陽腔系資料の六番目、『徽池雅調』を挙げておきたい。ここに收録された「誤接絲鞭」は、例の大團圓直前世隆と瑞蘭が縁談承諾をめぐって痴話喧嘩する場面である。收録の曲牌は「月兒高」一曲のみ。既に述べたように、この場面は世德堂本にも四十齣系諸本にも既に見えない。元曲版の第四折及び『彙纂元譜南曲九宮正始』と嘉靖本『舊編南九宮譜』收録の越調過曲「二犯排歌」「五般宣」がそれに相當する。

○元曲第四折

〔水仙子〕須是俺狠毒爺強匹配我成姻眷。不刺。可是誰央及你箇蔣狀元。一投得官也接了絲鞭。我常把伊思念。你不將人掛戀。虧心的上有天。

〔胡十八〕我便渾身上都是口、待交我怎分辯。枉了我情脉脉、恨

綿綿、我盡忘飲饌夜無眠。則兀那瑞蓮、便是證見、怕你不信、後沒人處問一過。

○『彙纂元譜南曲九宮正始』

〔一犯排歌〕文官狀元武官狀元、兩姨處相回勸、不想這答兒裏重會再見、久別你先夫是誰過愆、早忘了當初囑付言、你言偏、我意堅、方纔及第如何便接了絲纜、有的話兒但只問你妹子瑞蓮。
〔五般宜〕他爲你盡忘食夜無眠、他爲你悽慘、淚連連、天教你重完聚續斷絃、這夫妻非同偶然、尊嫂別來康健、夫妻每俱再圓、伏望相公夫人作箇周全。

○『徽池雅調』

〔月兒高〕（旦）文官狀元郎武官狀元郎、兩下皆歡暢。……你的話兒偏偏記得。我的話兒今在那里。看將來、你是負心人、歹心偏、奴意堅、你若不肯信、有甚話兒又可問你家妹妹瑞蓮。自從那日分別後、奴爲你盡忘食夜無眠、情切切、淚連連……

「私は心變わらずあなたを思って、寢食を忘れ涙にくれていたのに、あなたは薄情な方。嘘だと思うなら瑞蓮に聞いてちょうだい。」瑞蓮の訴えは元曲から舊拜月亭に傳わり、世徳堂本が出る頃には姿を消したが、弋陽腔の流れをくむ徽調の中には残った。

このように、徽調には世徳堂本にも残らぬ古い面貌も傳わっており、散齣集が出版されるのは萬曆に入ってからだが、流入はかなり以前から始まっていたと見るべきであろう。そこから『摘錦奇音』に至るどこかの時点で、世隆と瑞蘭は金朝人ではなくなったのである。

③ 地方戲

崑曲が歌劇のメロディの一派を指し、且つそのメロディに據って成

『拜月亭』傳奇流傳考

立している劇種をも指すのと同様、弋陽腔も元來聲腔であり且つ劇種であった。明の嘉靖頃安徽のみならず、南京、北京、福建、廣東、湖南等の各地に廣く流行した。その後、崑曲の勢いに押されるが、康熙乾隆の頃には「南崑北弋東柳西梆」と四大劇種の一つに稱され、それを最後に、獨立した劇種としては絶滅したといわれる。しかし、曲腔は各地の民間曲と接觸して、現代に至る地方戲の中に「高腔」という聲腔支系を残した。現代の川劇、湘劇、婺劇、贛劇等の劇種に「高腔」が傳えられている。

弋陽腔の影響を受けた現代の地方戲の中に、『拜月亭』はどのように繼承されているのだろうか。もう一つの拜月亭——宋朝故事の系譜は、江西の東河戲高腔と四川の川劇高腔に見出すことが出来る。

(1) 『中國地方戲曲集成・江西卷』中國戲劇出版社 一九六二

「搶傘」（東河戲高腔）

(2) 『川劇』重慶市戲曲曲藝改進會編 重慶人民出版社 一九五四—

九五六

卷三「踏傘」（高腔）新川劇院編導組修改

卷十七「雙拜月」（高腔）陽友鶴、劉成基修改

卷二十二「請醫」（高腔）周企何、李文傑等整理

(3) 『川劇喜劇集』中國戲劇出版社編輯出版 一九六一

「請醫」（高腔）周企何、李文傑等整理 (2) と同一テキストである

これらのテキストには、明版『拜月亭』の面影がよく残っている。

例えば、東河戲高腔「搶傘」の

瑞蘭 哎呀君子呀、你可曾讀過詩書？

世隆 魯門秀才何書不讀？哪書不曉？

瑞蘭 是呀！（唱）既讀聖賢書、必達周公禮。惻隱之心人皆有、君

子啊！怎不與我相周濟？

や川劇高腔「踏傘」の

瑞蘭 君子請聽：（唱）君子熟讀聖賢書，必達周公禮。側隱之心，人皆有之。……君子啊！何不與奴相周濟？

は、前出「撲燈蛾」曲中の一部である。又、同じくこの二種には、瑞蘭が「夫妻」と言えぬ恥ずかしさに、「夫」の字の下にもう一字と謎をかけ、世隆の鈍い反應にじれるやり取りがある。「夫」の字をとり違えてとらんかんな返事をする世隆のおとぼけは趣向様々だが、そこで瑞蘭が

我看你明明知道夫妻二字、故意的爲難我。

（東河戲高腔「搶傘」）

那君子明明知道夫妻二字、假意不知、故意問我。（川劇高腔「踏傘」）「知つてゐるくせに意地悪ね」と唱つて、聴衆は湧いたであらう。既に述べたように、この演出は四十齣本系には見えず、世徳堂本及び弋陽腔系徵調の中に残されている。

更に川劇高腔「踏傘」には、

瑞蘭 君子你可曾讀過書？

世隆 何書不讀、哪書不曉。

瑞蘭 那我就耍盤你。

世隆 請盤。

瑞蘭 關關雎鳩、

世隆 在河之洲

瑞蘭 窈窕淑女（作羞狀）

世隆 君子好（故意地）——「來」——

といった世徳堂本から弋陽腔系徵調に流れた演出が應用されている。以上は若い男女の戀のかけひきを演出したもので、改變された四十齣

系には見られない通俗的手法が、このルートでは聴衆に好まれ、弋陽腔の脈流中に演出を膨らませていったのであらう。ちなみに『綴白裘』十集卷三所收の崑曲「幽閨記」「踏傘」の場面には、「夫妻二字」の演出も「詩經」の演出も見えない。崑曲の脈流のうちには、やはり定着力を發揮しなかったようである。

さて、これら高腔テキストに傳わる宋朝故事の系譜を見てみたい。東河戲高腔「搶傘」では、まず

瑞蘭 君子請聽：（唱）都只爲那金國作亂、那金國造反、家家逃生、

戸戸逃難。

と金の侵略が唱われ、

世隆 也不知你尊姓大名、家住哪里？

瑞蘭 君子請聽：（唱）犯香羅帶）家住、汴。京。城。鼓。樓。街。姓王名

瑞蘭、我本是閨閣一裙釵。

世隆 令尊？

瑞蘭 （唱）爹爹在朝奉君差。

……

瑞蘭 請問君子高姓大名、家住哪里？

世隆 大姐請聽：（唱）家住在、倪。城。縣。五。里。牌。姓蔣名世隆、我本

是鬻門之中一秀才。

この設定は『摘錦奇音』の「曠野奇逢」と同じである。

川劇高腔でも「踏傘」で

世隆 家住在東京城郊西關外、離。城。五。里。一。界。牌。生姓蔣名世隆、

我不才鬻門之中一秀才。

瑞蘭 家住在東京城內鼓樓街、門前植有一樹槐。奴姓王名瑞蘭、

本是閨閣中一裙釵。

と唱われる他、「踏傘」及び「雙拜月」で

兵荒馬亂、汴梁遭難、家家逃生、戸戸逃難

と一貫して宋朝故事系の設定を示す。「摘錦奇音」に現れた宋朝故事の系譜は、弋陽腔の傳播に伴って、支脈高腔の中に引きつがれているのである。

更に、川劇高腔「請醫」の場面は、世隆が瑞蘭と結婚した後病床に伏す招商店の場所を、店の主人黄公に

我們這瀟湘鎮。就是四通八達的來往要道
と言わせている。これは『龍會蘭池錄』の

還照の間、方に瀟湘鎮に至る。呂文德、初めて鎮尉と爲り、一方倚りて金城と爲す。士民安堵し、市肆行商多く其の間に叢聚す。

という設定に符合する。『龍會蘭池錄』のこの設定が筆者の獨創によるものか、既にあったものを受容したのかはわからぬが、宋朝故事の系譜に抱きあわせられて、流傳の過程に忍びこんだのであらう。

以上のように、世德堂本に傳わる舊拜月亭から弋陽腔系『摘錦奇音』への脈流中に發現した宋朝故事の系譜は、崑曲系テキストでの改變に於ては創られた通俗的演出の流傳と共に、弋陽腔支系腔の傳播によって地方戲の中に傳えられたと考えられる。

補足するに、賴炎元氏が『四大傳奇及東南亞華人地方戲』⁽¹⁹⁾中に紹介した、マレーシアに残る八和會館抄本粵劇『雙仙拜月亭』では、設定が宋の遷都を舞臺に、宋の尙書王鎮の娘瑞蘭と書生世隆の戀物語が語られる。但し、移動は汴梁に向けてである。世隆と義兄弟になる金人陀滿興福も秦興福と漢族らしい名のをあげる。劇の後半は、投身自殺を計って救われた世隆と、世隆が死んだと思ひ込んでいた瑞蘭が玄妙觀で再會するという、似ても似つかぬ筋になる。この粵劇が、直接

弋陽腔の影響を受けたものかどうかは不明だが、賴炎元氏も、南戲『拜月亭』との違いの第一を、民族意識に基いた、金朝故事から宋朝故事への改變に由來させている。ここにも主人公を同胞の血に還元しようとする受容の姿勢が受け繼がれている事は、指摘しておくべきであらう。

④ 說唱俗曲

說唱文學では、まず、蘇州、上海を中心に流行した彈詞と北京、東北を中心に流行した子弟書の中に『拜月亭』の演目が見られる。

彈詞のテキストは、復旦大學圖書館所藏の『幽閨記』鈔本二卷で、首尾完結したストーリーが保存されている。ここでは、

大元天子登龍位 權在中華管萬民

只因胡馬紛紛寇 分分離亂苦良民

君王要遷王都地 汴梁建國立乾坤 (一葉表)

と元兵に追われて汴梁に遷都する金朝故事系の設定で語り出され、

且說園中是甚人 應昌府中蔣員外

單生一子世隆身 有妹瑞蓮年十八 (二葉裏)

且說尙書王佐臣 君王差往邊遠去

番邦去探虎狼兵 天朝主意難違逆

忙歸府內別夫人 更有瑞蘭姣小姐 (四葉裏)

と南戲に沿って主要登場人物が設定される。二人の婚姻の場は、

這里便是廣陽鎮 此處招商店內間

であり、瑞蘭を連れた王尙書と瑞蓮を連れた夫人が合流する場所も「孟津驛」と南戲を繼承している。後半も、王尙書が世隆の縁談拒絶の譯を聞いて思ひ當たる節があり、娘を屏後に潜ませて面通しをさせ

という、六十種曲本系の演出がとられている。世徳堂本でも面通しの演出はあるが、そこでは世隆が縁談を受け入れてしまふ爲、妻と引き裂かれた身の上話をして尙書の注意を喚起する場面はない。彈詞『幽閨記』は、新拜月亭系統の影響を直接受けたものであろう。彈詞の流行した蘇州上海の地は崑曲隆盛の中心地でもあるから、その器をほぼそのまま受け継いでも不思議はあるまい。

一方、子弟書の方は、關德棟編『子弟書叢鈔』に清・百本張鈔本「奇逢」と清・別楚堂鈔本「劉高手治病」の二場面が収録されている。「奇逢」では、冒頭で、

大宋山河氣敗衰 金兵戎馬蕩塵埃

と金兵に蹂躪される宋の情景から説きおこされる。瑞蘭と世隆の素姓も

王瑞蘭破紅露玉低聲兒應、說家住在汴梁城內鼓樓街。姓王名瑞蘭痴長十七歲、父在朝中奉欽差。不意金兵來犯境、我母女相依逃難來。

であり

世隆說家住在汴梁城外五里臺。姓蔣名世隆虛度十九歲、我本是贅門一秀才。

という。『摘錦奇音』から高腔に傳わる宋朝故事の系譜が、固有名詞もそのままに引きつがれている。

この他に、廣東に流行った龍舟歌では、『中國俗曲總目』⁽²²⁾所收の以文堂本『閩諫瑞蘭』に

可恨金兵造反、擾亂汴京、母女逃難

の設定が見られる。京都大學人文科學研究所藏廣東曲本所收富桂堂版『新出龍舟歌瑞蘭許愿』では、金兵に追われ湖南に落ちのびたヒロイ

ン黃瑞蘭が、病床の蔣世隆の爲に願かけをする設定になっている。この設定は今のところ『龍會蘭池錄』にしか見られない。戯曲の流傳では願かけは無く、蔽醫者と呼ぶ「請醫」の場面が次第に獨立した滑稽戲にまで膨らんでゆく。宋朝故事流傳のルートには、『龍會蘭池錄』に直接影響された道すじがあったかもしれない。

時調俗曲では、『霓裳續譜』⁽²³⁾卷八所收の平俗帶戲殘曲「曠野奇逢」が、家住在汴梁城鼓樓街、姓王名瑞蘭、我本是不出閨門一女孩、我爹爹在朝內奉欽差。

を傳える他、清・華廣生『白雪遺音』⁽²⁴⁾卷二の馬頭調「扯傘」其二及び『霓裳續譜』卷六「梁字寄生草」曲が「汴梁的瑞蘭來逃難」と傳える。

以上挙げたのは、説唱俗曲中に積極的に宋朝故事の系譜を残すもののみである。他にも多くの「拜月亭」の演目は見えるが、それらはほとんど朝代を確定させる證據を残さず、むしろ彈詞のように積極的に金朝故事系を明らかにするものはまず見当たらない。即ち、説唱俗曲に見られるおおよその傾向は、朝代をぼかしてしまふか或いは積極的に宋朝故事系を主張するかの方向を取る。そこには、口承の間に物語をころがしてゆく民衆の心性が主人公の漢民族への呼び戻しに働きかけるという、受容の過程を見る事が出来るかもしれない。

おわりに

元曲に始まる金朝人王瑞蘭、蔣世隆の物語は、南戲に傳わって現代に至る長い流傳の過程中、恐らく遅くとも萬曆初頃には、設定に發想の轉換が起こったと考えられる。それが痕跡となって現れるのは、萬曆期の『龍會蘭池錄』と弋陽腔系徵調散齣集『摘錦奇音』に於てである。宋朝故事への轉換には、中華の地を漢民族王朝の手にとり戻した

明の民衆が、より親密感を求めて、主人公を同胞の血にとりこもうとする精神の働きがあっただろう。

流傳の背景には、まだ文字定着力が弱く、それだけに可塑的であった舊拜月亭の脈流が、二筋の軌跡を残した。一方で整理され定本化する事、即ち文字テキストとしても定着する方向へむかい、一方で、口承性の強い、庶民レベルのメディアで働いていた弋陽腔や説唱文藝になだれこんだのである。この枝分かれは、文字メディアの硬直性がテキスト校定による聲律、文辭の定本化に向き、口承メディアの柔軟性がその時その地の民衆の受け入れやすさに順應した痕跡ともいえよう。宋朝故事の系譜は、崑曲の流行による改變繼承の中では取り入れられなかった。或いは重要視されなかったのだが、一方でこれを根強く傳えていく力が働いている。そこには、嘉靖萬曆以來の弋陽腔系戯曲と補足するに説唱文藝の傳播力が大いに預っている。金の中都の人世隆・瑞蘭の『拜月亭』と、宋の汴梁の人世隆・瑞蘭のもう一つの『拜月亭』は、崑曲系と弋陽腔系の傳播ルートを軸とし、讀書人にも愛好者の多い文字定着性の強さと庶民に浸透した口承性の柔軟さ、洗練と通俗、中央文化への集中性と地域文化への擴散性といったメディアの文化的二層構造の中で、かなり明確に分離したまま同時平行的に傳わって來たと考えられる。

注(1) 『臆論』：「茲選集大曆至正間諸名人所著傳奇數套。原文古調、以爲章程。故寧質母文、問有不足、則取明初者一二以補之。」

(2) 『善本戲曲叢刊』影印(王秋桂主編、台灣學生書局、一九八四)

(3) 『內蒙古大學學報』一九七八年二期

(4) 『文獻』一九八六年一期

『拜月亭』傳奇流傳考

(5) 『善本戲曲叢刊』影印

(6) 『善本戲曲叢刊』所收 據大英圖書館藏本影印

(7) 『國色天香』卷二下層『劉生覺蓮記』小説に云う：「因至書坊得話本、特與生觀之。見『天緣奇遇』、鄒之曰、獸心狗行、喪盡天良、爲此話本其無後乎。見『荔枝奇逢』及『懷春雅集』、留之。」小説中「話本」と稱される書名は、全て當時の長篇文言小説である。

(8) この書の版本は多いが、これが現存最古であろう。大塚秀高「明代後期に於ける文言小説の刊行について」(『東洋文化』六十一、一九八一、三)に版本考が詳しい。

(9) 原文「又迫金兵而杭」。「東す」「西す」のように方向性を含む動詞として杭州の「杭」を用いたか？

(10) 明・顧起元『客座贅語』卷九

(11) 『善本戲曲叢刊』影印。(11)の原本は英國 Oxford Bodleian

Library藏。(12) 尊經閣文庫藏。(13)と(15)は内閣文庫藏。(14)

(16) 據合刻『秋夜月』(一九三〇年中國書店景印本)

(17) 『增定南九宮曲譜』卷十二「拜月亭」(金蓮子)曲評：「『驟』字『祐』字乃句中暗用韻、古人所謂短柱者也。豈可不點板作一句、而竟帶過去耶。これに對し、元譜に據る『九宮正始』は、「斯言雖善、但詞隱先生查勘猶未遍也。按元詞古曲於『驟』字『祐』字處、儘有不用韻者、不必拘之。」と古曲の聲律緩やかなるを述べている。

(18) 明・徐渭『南詞叙錄』：「今唱家稱『弋陽腔』、則出於江西、南京、湖南、閩、廣用之。」

(19) 王忠林、皮述民、賴炎元、謝雲飛合著、南洋大學亞洲文化研究所刊、シンカポール、一九七二。この書は東大東文研田仲一成教授の御教示に據る。

(20) 二卷二册五十七葉(上冊三十四葉、下冊二十三葉)、無邊無界、半葉九行二十一字(七言句三句)、讀十字一行二十字(十言句二句)。

(21) 上海古籍出版社，一九八四。

(22) 劉復、李家瑞等編，國立中央研究院歷史語言研究所刊，一九三二。

(23) 東京大學東洋文化研究所藏，清王廷紹藏，光緒六十年庚辰雙松刊本。

(24) 一九五九年北京中華書局影印本，明清康熙時刻本。